

タブロイド地域紙「市民プレス」第72号(2016/4/5発行)の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

- PAGE 2 「伊豆殿堀」は新座、志木・宗岡などに水の恩恵をもたらした
- PAGE 3 玉川上水を分水する -PAGE 4 用水の流路は・・・
- PAGE 5 大正十五年の高等小学讀本(巻の二)第六章『野火止の用水』から
- PAGE 9 昭和二十八年の野火止用水をカラー写真で撮影した、新井康二氏の功績を讃える
- PAGE 11 用水路をGCで、武蔵野台地を鳥瞰する -PAGE 13 水質が劣化して
- PAGE 14 志木市内の痕跡を辿る -PAGE 18 用水は川を越えて宗岡村へ
- PAGE 21 「いろは樋」は名所となる
- PAGE 23 百科事典はインターネットで -PAGE 25 ウィキペディアのあらまし

「伊豆殿堀」は 新座、志木・宗岡などに水の恩恵をもたらした

「伊豆殿堀」は、「野火止用水」ともいわれる

寛永十六年(1639)から寛文二年(1662)まで川越城主だった松平伊豆守信綱が、自分の領内に水を引くため玉川上水を分水した。この用水は、玉川上水の三十三もある分水の中では時期的に最も古く、分水量も多く、天領以外に引かれた唯一の分水で、分水地点の小川村(現小平市)から新河岸川に落ち込むまでの距離は二十四キロに及んだ。

用水開削の目的は・・・

正保四年(1647)、野火止を領地として願い出た伊豆守信綱は、その翌年、岩槻にあった平林寺を新座に移建する計画をたて、承応二年(1653)、五十四軒の農家を野火止に招致・定住させた。用水の開削は、移住して来た農民の定住を図ることによって、平林寺の基礎を強化することを狙ったものと見られている。

玉川上水を分水する

すでに信綱の家臣、安松金右衛門が承応三年（1654）、玉川上水の完成に大きく貢献した実績があり、松平信綱が当時老中という幕府の要職に就いていたことが、江戸の市民にとって極めて重要な玉川上水を分水できた、と考えられている。

工期と費用は・・・

安松金右衛門が工事責任者となり、工期は従来は三年とされていたが、近年、「榎本弥左衛門之覚」の記述から、承応四年（1655）二月十日～三月二十日の四十日が定説となっている。

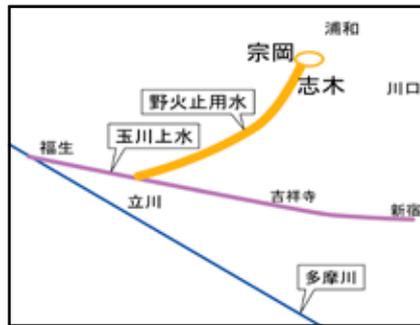
なお、建設費は三千両とされているが、内訳や根拠は不明。用水は、主として農家の飲用水として用いられたが、田畑の用水としても使われ、水運に恵まれなかった武蔵野台地のほぼ中央の恵みの水路となる。

用水の流路は・・・

多摩郡小川村で玉川上水から分水された用水は、武蔵野台地を下り、新座郡西堀村（現・新座市西堀）の東で菅沢村（現・新座市菅沢）方面に分水されて二筋に分かれる。南側の流れはさらに二筋にわかれて一筋は平林寺境内を通り（通称平林寺堀）、もう一筋は高崎藩の野火止陣屋に引き入れられたあと、野火止村（現・新座市野止）の生活用水に利用された。川越街道で平林寺堀に合流した流れ（通称陣屋堀）の末流は、宮戸村（現・朝霞市宮戸）の方面へと続く。また北側の流れ（本流）は平林寺の北側を通り、川越街道を越えて、かつての「館村」（現・志木市）に向かう。



火



多摩川の上流から・・・
用水の水路

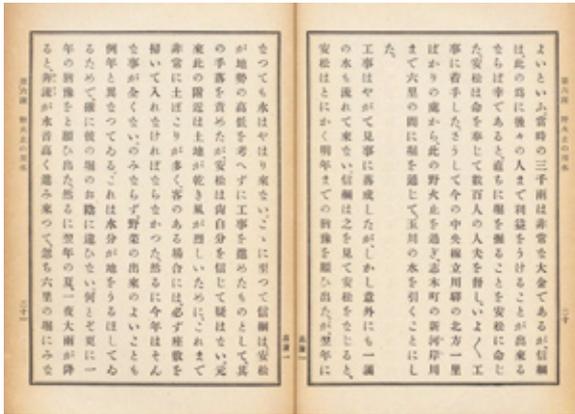
大正十五年 高等小学讀本（卷一）
文部省『国語讀本』から



第六章 『野火止の用水』
東京の西北数里、野火止という所がある。今は埼玉県北足立郡大和田町に属しているが、見渡す限り、うち続く畑の間には、森あり丘あり家あり流れあり、春は菜の花、麦の緑、秋はすすきの波、雑木の紅葉、武蔵野の面



影が今に残つて見るからに野趣に満ちた眺めである。昔この付近一帯は、彼の知恵伊豆といわれた松平信綱の領地で、その菩提寺平林寺もこの野火止にある。
平林寺の門をくぐつて薄暗いばかりに茂つた、楓の下を進むこと約二町、本堂について右折すれば、杉や檜の生い茂っている林の奥に、信綱の霊は静かに眠っている。敷石の苔を踏んでここに詣でる者は、あたりの静けさを破つて、玉の如き水が勢いよく流れているのを見るであらう。有名な野火止の用水とは即ちこれで、この水を引くについては、おもしろい話が今に伝えられている。
元来野火止一帯は、土地高く、水利に欠け、土もやせて、見るからに貧しい村であった。信綱が川越城主としてこの地を領していた時、代官安松金右衛門は、新たに堀を掘つて玉川の水を引けば、必ず田畑が出来ると思し出した。そこで信綱がその費用の見積りを尋ねると、三千



両あればよいという。当時の三千両は非常な大金であるが、信綱はこのために、後々の人まで利益をうける事が出来るならば幸いであると、直ちに堀を掘る事を安松に命じた。安松は命を奉じて数百人の人夫を督し、いよいよ工事に着手した。こうして今の中央線立川駅の北方一里ばかりの所から、この野火止を過ぎ、志木町の新河岸川まで、六里の間に堀を通じて玉川の水を引くことにした。

工事はやがて見事に落成したが、しかし意外にも一滴の水も流れて来ない。信綱はこれを見て安松をなじると、安松はとにかく明年までの猶予を願い出たが、翌年になつても水がやはり来ない。ここに至つて信綱は、安松が地勢の高低を考えずに工事を進めたものとして、その手落ちを責めたが、安松は尚自分を信じて疑わない。元来この付近は土地が乾き風が激しいために、これまで非常に土ほこりが多く、

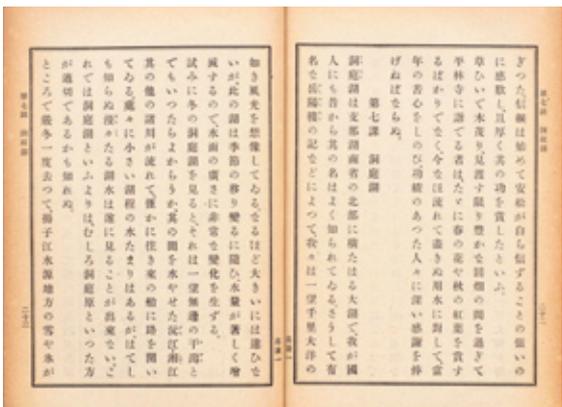
客のある場合には、必ず座敷を掃いて入れなければならなかつた。然るに今年はそんな事が全くない。のみならず、野菜の出来のよいのも例年と異なっている。これは水分が地をうるおしているためで、確かにかの堀のお陰に違いない。何とぞ更に一年の猶予をと願い出た。然るに翌年の夏、一夜大雨が降ると、奔流が水音高く進み来て、たちまち六里の堀にみなぎつた。信綱は始めて安松が自ら信じる事の強いのに感歎し、かつ厚くその功を賞したという。

草ひいで木茂り、見渡す限り豊かな田畑の間を過ぎて、平林寺に詣でる者は、ただに春の花や秋の紅葉を賞するばかりでなく、今なお流れてつきぬ用水に対して、当年の苦心をしのび、功績のあつた人々に深い感謝を捧げねばならぬ。

注 この元には、新井白石の神書(隨筆)が使用されている。

新井白石(二六五七〜一七二五)は、江戸時代中期の儒学者で、徳川六代、家宣・七代、家継將軍のとき、側用人の間部詮房まなべあきらむとともに政治に力を尽くした。

*漢字仮名使い、句読点の一部は、現代で使用されているものに置き換えた。



昭和二十八年の 野火止用水

II 新井康二氏の功績を讃える II

昭和二十八年の野火止用水をカラーで



新井康二氏

大正11年志木市本町に生まれ、
浦商（現・浦和商业高校）に進学。

昭和18年千代田区北の丸「近衛歩兵第二連隊」に入隊して皇居守衛の任務に就く。終戦により復員。昭和28年初めてのカラーフィルムで「野火止用水」を撮影、埼玉県スライドコンクールで特選となる。

「玉川上水」

多摩川の急流と別れた上水は、緩やかな流れとなって新宿方面に向かう、途中の小金井付近の上水は水量も豊富で、春の桜堤、夏の水辺等名所も多い。

幕府の管理下にあった上水は、明治以降東京の水道局管理となる。



「平林寺境内の用水」

秋の紅葉、夏の緑等々の木々に映えて流れる用水に対して、遠く奥多摩の山々より流れてきたことに懐かしさを感じさせる。



「野火止用水口」

明治四十一年四月改造と刻まれた石の取り入れ口



「測量想像図」

東京都小金井にあった資料館に保存されていた絵。今はその行方が不祥である。昭和28年頃に撮影。

夜間、竹竿の先に提灯をつけ、その灯りで土地の高低を測ったと伝えられている。

「新田開発」

野火止水水の開削と平行して農地の開発が行われ、そこに用水をくまなく分水して流した。街道を中心に流して各個均等に短冊型に住居、畑、雑木林等が分配された。



「志木駅付近から、西方を望む」

現在、結婚式場・宴会場の「ベルセゾン」が建っている付近で、遠く川越街道の並木が見える。当時は、川越街道と志木駅との間には、農家が点在するのみだった。

「用水は農民の宝水とされ、用水組合による清掃作業も厳格だった。流れの分水等による水争いも起こったと伝えられる」



「畑の中の用水」

数本に分水され、各集落の農地を巡っていた。野菜類の出荷には欠くことのない用水だった。



用水路をCGで・・・

武蔵野台地を鳥瞰する



水質が劣化して

昭和二十年(1945)、第二次世界大戦が終結し、生活様式が急激に変化すると、野火止用水は本来の役割を失い、生活排水が用水に入るようになる。特に昭和三十八年ころから、周辺の宅地化が進行したため水質汚染が激しくなった。その後、東京が水不足となって分水が一時中止され、再度通水されたが、水質汚染は改善されず、昭和四十八年、東京都の水事情の悪化のため、ついに玉川上水からの取水は停止される。



左の写真は
「現・慶応高校の校内を流れる用水」

右の写真は「志木市場通りの用水」

大通りの中央を流れ、石橋が架かっていた。
昭和40年に用水は暗渠となり、地下は下水路おなる。
江戸時代には、用水の流れと、新河岸川の船便で江戸と川越が繋がれ、その中継地点として繁栄した市場商店街は、東武東上線の開通と船便の廃止によって徐々に活気を失っていった。



野火止の中心より朝霞寄りの農地を流れて東に下った用水は、現在住宅展示場になった地域(かつては雑木林だった)を通過して、東上線の線路下(現在は地下通路になつている)を通過して現在の慶応高校々地内(以前は一面の雑木林)に入つて、清冽な水が豊かに流れていた。
新河岸川の方に流れ、現・朝霞市内間木の水田に注ぐ。

埼玉県と新座市は、野火止用水を復活する事業を策定した・・・

東京都とともに、昭和五十九年、高度処理水(下水処理水)を使用して水流を復活させた。
そこで新座市域までの流域は清流が復活して、住民の憩いの場となっている。

志木市内の痕跡を辿る

なお、市内にはいくつもの分水路があったが、これらも今では痕跡を留めるだけになった。
幸い、NPO「エコシティ志木」のメンバーが、街の中に人知れず残る用水の跡を詳細に調査されているので、左下の図によってこれを紹介する。

用水は新座市域で東側の分流と本流に分かれ、西側の本流は、志木市内の入り口で分水、

分流はさらに分岐していた。

〔1〕東側の慶應志木高校内のルート、西側は〔2〕志木市の『旧道』（志木街道）から大通りに入るルートと、〔3〕志木駅南口柳瀬川寄りの交差点からの分流。

〔1〕東側の慶應志木高校内のルート

東側ルートは新座・朝霞境界沿いの朝霞側を流れてきた水路が慶應通り陸橋の朝霞側地下道の位置で線路をくぐり、慶應高校構内を経て、朝霞・志木境界の谷津地の朝霞側斜面の中腹を新河岸川に向かっていたが、途中で分かれて、朝霞の宮戸方面にも流れていた。

今でも慶應高校の構内には素掘りの水路が森の中に残っている。

〔2〕中央の志木駅南口交差点から『志木街道』に入るルート

本流は、旧奥州街道に沿って市場地区（本町一、二丁目）に至り、新河岸川と交差して宗

岡に入った。

〔3〕本流から西側に分かれた分水は直ぐに二本に分かれ、直進する流れは愛宕通りを西に進み、防衛道路との交差点（大塚建材）を過ぎた所で二手に分かれ、いずれも柳瀬川方向の低地に向かって流れていた。

愛宕通りから右へ分かれた分水は線路を越えて柏町の「中道」を進み、氷川神社裏手から低地に向かって流れていた。

「中道」の片側歩道や氷川神社・第二福祉センター裏、住宅地内の排水路等に名残りを残している。

用水の水車は動力として使われる

穀類精製のための水車は、高句麗（こうくり）の僧によって、推古天皇十八年（650）に初めて日本にもたらされたが、粉食の習慣のなかった我が国では余り普及することがなかった。しかし、江戸時代に入り城下町を中心に白米の需要が増大してくると、精米のために大いに活用されることになった。享保期（1756～1766）と言われているが、やや遅れて玉川上水の本流、支流にも水車が開設されるようになった。

引又の水車は・・・

志木市内に入った用水の流路を探る



後に川岸の水車・中の水車・上の水車と呼ばれた各水車は、宝暦十二年（1762）・明和七年（1770）・安永五年（1776）にそれぞれ開設された。

野火止水筋では引又の水車が首位、玉川上水筋全体から見ても引又の水車が上位を占めたのは、次のような理由によるものと思われる。

① この地が宿場町・市場町・河岸場として米飯の供せられることが多かった

宿場町としては、奥州から府中に通じる奥州街道が、同時に中山道から川越街道へ抜ける間道としての役割も果たしていたので、高崎藩主松平右京亮の江戸出府往復の際の通過を始めとして、一般の人馬の往来も頻繁で、これらの人馬がこの地に休息することが多かったようである。

また、引又は河岸場でもあり、遠くは青梅・八王子・甲府辺りにまで及ぶ広大な取引圏を背後に擁していたし、三と八のつく日には市が立って、周辺地域から多数の人が交易に集まったので、これらの人たちに提供する飯米用に米を精製しなければならなかった。

② 酒造業が六軒あつて原材料としての白米の需要が大きかった。河岸場に近く、出荷するのに便利だったことと、井戸水が酵母の発酵を促す成分を多量に含有していたことによつて、古くから酒造業が発達した。

少なくとも天明年間（1784～1789）には造酒屋が四軒あつた。また、幕末には六軒の業者が年間合計一五六八石もの米を酒に醸造する鑑札を持つていたほどで、これだけ大量の米を精製するためには、当然のことながら水車の力を借りねばならなかった。

用水は川を越えて宗岡村へ

当初の用水は、「引又村」の坂下（現・市場坂上）で新河岸川に流れ込んだ。ところが、宗岡村を知行していた旗本岡部氏の家臣白井武左衛門は、かねがね、宗岡村が用水に乏しいことを憂えていた。そこで、この用水の末流を、対岸の宗岡村まで延長しようという計画を立案した。

宗岡村のうち、上宗岡と下宗岡を知行していたのは岡部氏だが、一方、引又の対岸にあたる中宗岡は、用水の開設者である川越城主松平信綱の領するところだった。そこで武左衛門は、主君岡部氏を通して信綱に願い出て許可を得て工事に取り掛かった。信綱に願い出て許可を得て工事に取り掛かった。

二つの升を設けて水を高所に・・・

宗岡村まで用水を引くためには、その間を流れる新河岸川を渡らなければならぬ。そのため、引又側では、坂上から坂下までを埋樋とし、これに用水の水を通し、川の畔で一

次的に地上で貯める。この水を、新たに掛けた樋へと登ってゆくように設計された。埋樋の長さは五八間・幅二尺で、この間に二つの高升たかますを設置したのは、なんと埋樋の水を高所に登らせるための工夫だった。

すなわち、坂上に設けた小升こますに一旦水を溜めて、これを河岸近くに設けた大升おほますに送ると、埋樋によって坂を落下した水は、大升の脚部の口から流れ込んで升を満たし、反対側上部の口から激しく流れ落ち、掛樋へと送られるのである。

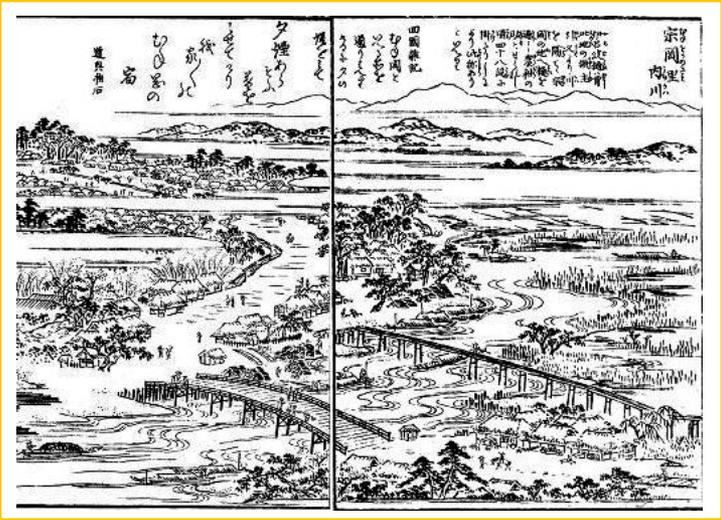
「いろは樋」は名所となる

大枘から勢いよく流れてきた流水を上向きの笕（登り竜といわれる）に登らせて新河岸川を越える。この時の水路橋の柱は四十八本あったため、伊呂波四十八文字に因んで「いろは樋」と呼ばれた。

川を跨ぐこの巨大な樋の姿は、やがて有名になって、多くの紀行文や地誌などに描かれた。

左図に示すのは・・・

江戸名所図会づえは、斎藤月岑が、江戸時代後期の天保年間に刊行した江戸と近郊の地誌紀行図鑑で、鳥瞰図を用いて描かれた（七巻二十冊）。「いろは樋」を望む鳥瞰図もその中に取められている。



明治三十年年の写真



左の写真が撮影された直後に、木樋は鉄管に取り替えられた。現在、「郷土資料館」敷地内や、「いろは橋」際に展示されている配管や、市の指定文化財となった、煉瓦造りの大樹は、すべて鉄管時代のもの。



百科事典はインターネットで
internet/online encyclopedia
画面上で文書を検索し、ウェブ上の
他の情報源（リソース）に直接リンク
できること（検索エンジンの基盤として）、
アクセスの利便性があったて、配本コストが不要なこと、などによって、インターネットの
百科事典は、かつての分厚い百科事典の利用を過去のものとしてしまった。

「コトバンク」は・・・

Kotobank（コトバンク）は朝日新聞社が主体となつてとりまとめたインターネット百科事典で、その特色は、新聞社が提供するウェブサイトとして、報道記事中の用語解説が強化され、朝日新聞サイト掲載記事にもリンクする。

2009年4月、正式に発足した時には、同社と講談社、小学館、朝日新聞出版の各社が提供するものを核として、44の辞書・事典の計25万項目を網羅した。

用語の横断検索ができるサービスとして公開されたので、百科事典から、人名辞典、国語・英和・和英辞典、現代用語辞典や専門用語集などの内容が検索でき、情報は随時更新され、追加されている。

「コトバンク」は、基盤を成す情報源が、選ばれた執筆者、これを審査・編集する段階を経ているので、用語解説の信頼性が高く、次項に紹介する「ウィキペディア」とは差別される。

日本語のインターネット百科事典として

ATOMICAは、高度情報科学技術研究機構（RIST）が、専門家に執筆を依頼して運営される。また、Weblioは、ウェブリオ株式会社によって無料で提供されている。

その他の日本語の電子辞典として利用できるのは、Yahoo!百科事典（ベータ版）、ソースは、日本大百科全書（ニッポニカ）、参加型では、ニコニコ大百科、はてなキーワード、エンペディア、などが知られる。



Wikipedia のロゴマーク

ウィキペディアは・・・

ウィキメディア財団によって運営され、多言語参加型（資格は不要）。

「ウィキペディア」は、執筆、審査、編集をすべてボランティアの恣意に任せることを特徴として構築され、国際的な規模で急激に成長した。トップの地位を占め、世界で最大の規模の電子百科として、今では情報検索に不可欠なものとなっている。

日本語で書かれた項目は、日本の知識人がボランティアとし寄与したに違いないが、蓄積された情報量は、日増しに充実して、すでに膨大なものになっている。

ただし、問題とされる欠点は、審査・編集者の責任態勢の欠如が、しばしば用語解説の信頼性への不安感となっていて、信憑性を確認する対策は、最終的には、すべて利用者に一任されている。

ウィキペディアのあらまし

英語で Wikipedia は、ウィキメディア財団が運営するインターネット百科事典。コピーレフト（著作権を保持したまま、二次的著作物も含めて、すべての者が著作物を利用・再配布・改変できなければならないという考え方）なライセンスのもとで、サイトにアクセスが可能で、誰も

が無料で自由に編集に参加できるというもので、世界の各言語で展開されている。

Wikipedia という名前は、ウェブブラウザ上でウェブページを編集することができる「ウィキ (Wiki)」というシステムを使用した「百科事典」(英: Encyclopedia) に由来する造語という。設立者の一人であるラリー・サンガーにより命名された。

使用言語は 291 言語

項目数は全言語総計が 2016年2月11日現在で、 38,645,599

日本語版 1,009,791

運営元は

ウィキメディア財団

資金：寄付、非営利。

設立：2001年1月15日（英語版）

設立者：ジミー・ウェールズ

ラリー・サンガー



2007年、京都にて
ウィキペディアの創始者の
一人。愛称はジンプ。1966
年生まれ、現在アメリカの
フロリダ州に在住。

「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によつて市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」は市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL090 (3048) 5502

編集部 原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回(二、四、七、十月、各五日)発行